1月購入図書

平成30年1月　　新規購入図書一覧（一般）

NO	図書分類	タイトル	著者	コメント
1	913	世に棲む日日（1）	司馬遼太郎	嘉永六（1853）年、ペリーの率いる黒船が浦賀沖に姿を現して以来、攘夷か開国か、勤王か佐幕か、をめぐって、国内には、激しい政治闘争の嵐が吹き荒れる。この時期骨肉の抗争をへて、倒幕への主動力となった長州藩には、その思想的原点に立つ吉田松陰と後継者たる高杉晋作があった。変革期の青春の群像を描く歴史小説全四冊。
2	913	世に棲む日日（2）	司馬遼太郎	海外渡航を試みるという、大禁を犯した吉田松陰は郷里の萩郊外、松本村に蟄居させられる。そして安政ノ大獄で、死罪に処せられるまでの、わずか三年たらずの間、粗末な小屋の塾で、高杉晋作らを相手に、松陰が細々とまき続けた小さな種は、やがて狂気じみた、すさまじいまでの勤王攘夷運動に成長し、時勢を沸騰させてゆく。
3	913	世に棲む日日（3）	司馬遼太郎	狂躁の季節がきた。長州藩は既に過激派の高杉晋作をすら乗りこえ藩ぐるみで暴走をかさねてゆく。元治元（1864）年七月に、京へ武力乱入し壊滅、八月には英仏米蘭の四カ国艦隊と戦い惨敗…そして反動がくる。幕府は長州征伐を決意し、その重圧で藩には佐幕政権が成立する。が、高杉は屈せず、密かに反撃の機会を窺っていた。
4	913	世に棲む日日（4）	司馬遼太郎	動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し…。わずか八十人で兵を挙げた高杉晋作のクーデターは、きわどく成功する。幕府は、慶応二（1866）年、この長州藩を圧し潰そうと、天下の兵を糾合し、藩の四境から進攻するが、時運はすでに移り変っていた。維新の曙光を認めながら、しかし高杉はもはや死の床にあった。
5	913	風神の手	道尾秀介	彼／彼女らの人生は重なり、つながる。隠された“因果律”の鍵を握るのは、一体誰なのか—章を追うごとに出来事の“意味”が反転しながら結ばれていく。数十年にわたる歳月をミステリーに結晶化した長編小説。
6	914	妻に捧げた1778話	眉村　卓	癌と闘う妻のため、小説家の夫は毎日１篇の話を書き続けた。妻のために書かれた1778篇から選んだ19篇に、闘病生活と40年以上にわたる結婚生活を振り返るエッセイを合わせた、ちょっと風変りな愛妻物語。
7	913	かがみの孤城	辻村　深月	どこにも行けず部屋に閉じこもっていたこころの目の前で、ある日突然、鏡が光り始めた。輝く鏡をくぐり抜けた先の世界には、似た境遇の７人が集められていた。胸に秘めた願いを叶えるため、７人は隠された鍵を探す…。

8	49	健康という病	五木寛之	健康という病が、いま日本列島を覆っている。メディアに溢れる健康情報は、それぞれ科学的根拠や統計、資料などの専門話を駆使して、いかにも説得力のある気配をもたらしているが問題は、それらがしばしば正反対の意見を主張することだ。 ・・・ 正しい情報を見つけ出すヘルスリテラシーのすすめから、養生の作法、医療との付き合い方まで、 健康ストレスがみるみる解消する新・健康論。
9	913	おもかげ	浅田次郎	浅田文学の新たなる傑作、誕生—。定年の日に倒れた男の“幸福”とは。心揺さぶる、愛と真実の物語。
10	913	屍人荘の殺人	今村　昌弘	第27回鮎川哲也賞受賞作。神紅大学ミステリ愛好会に所属する葉村譲と会長の明智恭介は、曰くつきの映画研究会の夏合宿に興味を抱き、同じ大学に在席する探偵・剣崎比留子と共に紫静荘を訪ねた。部員たちは肝試しと称し神社に赴くが、異常事態に遭遇し…。
11	361	学校では教えてくれない差別と排除の話	安田浩一	「なぜ中学や高校で差別や排除を教えないのだろう？」そんな筆者の素朴な疑問から始まり、「それなら差別と排除の教科書を作ってみよう！」と、この本は生まれました。すべての子どもたちと親、そして教師の必読書！
12	913	盤上の向日葵	柚木　裕子	埼玉県天木山山中で発見された白骨死体。遺留品である初代菊水月作の名駒を頼りに、叩き上げの刑事・石破と、かつてプロ棋士を志していた新米刑事・佐野のコンビが捜査を開始した。それから四か月、二人は厳冬の山形県天童市に降り立つ。向かう先は、将棋界のみならず、日本中から注目を浴びる竜昇戦の会場だ。世紀の対局の先に待っていた、壮絶な結末とは—！？
13	913	長いお別れ	中島京子	帰り道は忘れても、難読漢字はすらすらわかる。妻の名前は言えなくても、顔を見れば、安心しきった顔をする…。ふたり住まいの老夫婦に、娘が3人。認知症の父と家族のあたたかくて、切ない10年の日々。